

も Hak Ulayat や beschikkingsrecht あるいはコミュニティ林への言及がなかった [Mizuno *et al.* 2023] ことを思えば、よりましではあったとも言える。もちろん「慣習法共同体によって支配される」森林の利益が国家林の開発の利益に従属する（ないし森林開発を優先している）との問題点は存在していた。この問題点は土地基本法とも共通していた。

本書は英語出版がふさわしいと考えるため、英語版の作成にあたって特に重要だと思われる点を述べて。

(水野広祐・School of Environmental Science,
University of Indonesia : 京都大学名誉教授)

参考文献

- Burns Peter J. 1999. *The Leiden Legacy, Concepts of Law in Indonesia*. Jakarta: PT Pradnya Pramita.
- Mizuno, Kosuke; Hayati Sari Hasibuan; Okamoto, Masaaki; and Farha Widya Asrofani. 2023. Creation of the State Forest System and Its Hostility to Local People in Colonial Java, Indonesia. *Southeast Asian Studies* 12(1): 47–87. https://doi.org/10.20495/seas.12.1_47.
- 大鎌邦雄. 1990. 「インドネシアの農村組織と農村社会構造——西部ジャワ州の天水田の農村調査から」『農業総合研究』44(2): 109–151.
- Vollenhoven, C. Van. 1919. *De Indonesiër en Zijn Grond*. Leiden: Boekhandel en Drukkwrij V/H e. J. Brill.
- Westenak, L. C. 1918. *De Minang Kabausche Nagari*. Weltevreden: Visser.

原 民樹；西尾善太；白石奈津子；日下 渉（編著）. 『現代フィリピンの地殻変動——新自由主義の深化・政治制度の近代化・親密性の歪み』花伝社, 2023, 280p.

本書序論にて日下渉は、「つながりで貧困を生き抜く社会」から「個人の規律と勤勉で成功を目指す社会へ」という2000年代以降のフィリピン社会の変容を、「大転換」と形容する。ポランニーの論じた19世紀イギリスにおける自己調整的市場の誕

生と、経済の社会からの「脱埋め込み」という世界史のプロセスを連想させるような「地殻変動」が進行中であるという認識が、そこに示唆されているのであろう。しかし、その変容を捉える著者たちの視点は一樣ではない。むしろしばしば対立し合う議論が混在している。以下、まず各章を簡潔に紹介した後、私自身のコメントを述べる。

序論「新時代のフィリピン人——なぜ『規律』を求めるのか」（日下）の初発の問いは、2016年以降政権についてドゥテルテ大統領が、その麻薬戦争において数万の死者を出したにもかかわらず、なぜ階層を超えた幅広い国民からの支持を得たのかである。日下によれば、2000年代中ごろ以降の新自由主義の浸透とサービス産業を中心とした収入機会の増大は、懲罰的な「規律」を希求する「新時代のフィリピン人」を生み出した。同時に、「かつて人間関係が全てで善悪の曖昧だった社会において、規律の名のもとに善悪の二項対立を強調する政治が支持を呼び、『悪しき他者』への排除が進行している」（p. 16）。

続く批判的序論「2010年代のフィリピン政治をどう理解するか——社会民主主義への転換」（原民樹）は、日下とは真つ向から対立する視点で変容を捉える。原によれば、「ドゥテルテは新自由主義化による分断から生まれた指導者ではない」。さらに、「フィリピン史上もっとも国民レベルで政治的志向性が統一されている時代に『分断』を見出し、貧困層が福祉制度に包摂されながら階級上昇を果たしていく時代に『新自由主義』を見出すという倒錯が生じている」（p. 44）と日下の論を批判する。そして、2010年代以降のフィリピンは、社会民主主義と反寡頭制を目指す「まともな近代国家」へ向かっていると述べる。

二つの序論に続く各章は、第1部「フォーマリテイへの欲望」（第1章から第5章）と第2部「ままならないインティマシー」（第6章から第10章）に分かれる。第1章「揺らぐ寡頭制——ディナガット州における革新政治の展開」（原）では、ミンダナオ島北東に位置するディナガット州で2010年代に生じた地方政治の変化、すなわち伝統的エリートから革新派政治家への政権交代に注目する。それを通して、「新自由主義+寡頭制の政治から社会

民主主義+反寡頭制の政治への変化が、国政レベルだけでなく、経済発展が大きく遅れた地方においても観察されること」(p.54)が論じられる。第2章「包摂的成長と再定住の政治——2010年代におけるマニラの空間再編」(藤原尚樹)は、2010年代のアキノ政権、ドゥテルテ政権で浸透した「包摂的成長」の理念のもとでの都市開発と再定住政策に注目する。「包摂的成長」は、インフォーマルな都市居住のフォーマル化をもたらした。しかし、同時に浸透したのは、「負債の生政治」、すなわち「全生活領域が債務関係に絡め取られるなかでその負債の返済を忠実に履行しようとする個別的主体をつくりだす」(p.86)権力であった。第3章「『レッドテープ』からの脱却——法制度と執行体制の整備による非属人的制度の模索」(宮川慎司)では、ドゥテルテ政権下の2018年に制定されたビジネス簡易化法に注目し、いかにレッドテープ、すなわち煩雑な行政手続きが簡略化されていったかを論じる。特に、属人的で理不尽な法の執行という序論で日下が描いたドゥテルテ像とは対照的な、法制度を通じて、多数の国民に望まれる改革を行うドゥテルテ像が描かれる。第4章「発展する胴元国家、生き残る違法賭博——ドゥテルテ時代の賭博政策をめぐる人々と政治」(師田史子)は、ドゥテルテ政権下の違法賭博の取り締まり厳格化を論じる。そこでは、違法賭博に合法的な運営権が付与され、闇経済がフォーマルな市場に統合され、違法数字くじの撲滅と同時に収税の拡大が図られた。第5章「スペクタクル化する『マンガの島』——ギマラス島における産地再編の光と影」(中窪啓介)は、国内有数のマンガの産地として知られるギマラス州での調査をもとに、国や地方自治体(州政府)の積極的なギマラス産マンガの品質管理、ブランド化、さらには観光やフェスティバルと組み合わせた「スペクタクル化」の事例が論じられる。

第6章「再編される親密性——生政治と死政治に引き裂かれる人々」(西尾善太)では、原によって指摘された2010年代のフィリピンにおける公助と自助の拡大に対し、「共助の再編」、つまり人びとの間の親密な関係性の再編に注目する。海外出稼ぎ労働者と麻薬戦争の事例を通して、このよう

な共助の再編が、「生に値する者への社会福祉(生政治)と値しない者への暴力(死政治)」というキメラの統治をもたらしている」(p.159)ことを論じる。第7章「『親しみやすさ』の複数性——コールセンターとKTVの労働世界」(田川夢乃)は、成長著しいフィリピンの第三次産業を「親密性の労働」と捉える。コールセンターのエージェントと、日本人男性向け接待飲食業で働く女性たちに焦点をあて、その労働の現場ではいかなる感情の操作による親密性が生み出され、提供されているのかが論じられる。第8章「OFWの身体に対する『遅い暴力』——農村男性の出稼ぎ先における痛みをめぐる」(飯田悠哉)は、日本の高冷園芸産地で働くフィリピン人技能実習生、あるいは特定技能労働者たちが経験する「遅い暴力」(行使する側の不作為のもとに加えられる暴力)を論じる。ドゥテルテ政権は、海外労働者に加えられる「遅い暴力」や身体的被害を敏感に察知し、さまざまな保健衛生政策を打ち出した。第9章「他者への応答としての『リホック』——元OFW女性の日常から見る現代フィリピンの共生と分断」(吉澤あすな)では、マリアという一女性の事例から、日常の諸問題への対処として、他者への応答としての、絶え間ない「動き(*lihok*)」を検討する。身体の不傷性と他者との被縛的な関係性の中から立ち現れるリホックに注目することで、契約や規範ではなく、流動的で偶発的な応答の連鎖による連帯の可能性が見えてくる。第10章「消費される未来、沈殿する過去——妊娠期における喪失経験と女性たちの応答」(久保裕子)では、妊娠期における喪失を経験した女性たちへのインタビューに基づき、「未来を投機する女性たちの有様」を論じる。そこからは、差し迫る日々の問題に「急場を凌ぐ方法を模索」し、かつ瞬時に対応し応答する主体性、ふと現れては消えるような女性たちの横顔が垣間見えるという。最終章「結論にかえて 現代フィリピンにおける時間/テンポの加速と揺らぎ——継ぎはぎされる『変化への希求』」(白石奈津子)では、序章とも批判的序章とも異なる視点から、各章が意味づけ直される。最終章がもつ意義については、以下のコメントの中で触れたい。

本書は、フィリピンの「国のかたち」と人びと

の生の変容に関する、若手研究者による白熱した議論であり、フィリピンという一国を超え広くグローバルサウスの文脈において重要な諸事例を提示しており、その点は高く評価できる。しかしここでは、「批判的序論」での原の主張、すなわちフィリピンは社会民主主義的福祉国家へと移行しつつあり、そこではこれまでの共助に支えられる社会によるよりも、公助と自助の領域の拡大によって貧困層の包摂が進んでいる、という議論に対し、二つの批判的コメントを述べたい。一つは、フィリピン社会の変容の中で進みつつある包摂については、より慎重な議論が必要であること。二つ目は、公助／共助／自助を明確に区別されたカテゴリーに分け、それぞれの領域の拡大や縮小を議論することの妥当性についてである。この2点について、本書の各論に触れつつ論じていく。

まず、近年のフィリピンにおける公助と自助の拡大を、社会民主主義的福祉国家への移行として捉えてしまうと、そこでの包摂が、あくまでも国家の統治、社会秩序の維持、グローバル資本の論理への労働者主体の包摂であるという点を見逃してしまう。第2章（藤原）の論じる都市貧困層の郊外への再定住政策において浮かび上がるのは、撤去と立ち退きを国家の「善意 (benevolence)」として受容し、持ち家とローン返済を市民的生活として自ら欲する主体として人びとを成型する生権力の働きである。第7章（田川）におけるコールセンター・エージェントやKTVで働く女性たちの事例は、グローバルなサービス産業が、いかに細やかな感情の操作と親密さの商品化によって支えられているかを示唆している。第8章（飯田）の技能実習、特定技能労働者に加えられる「遅い暴力」の事例は、公的福祉による海外労働者の保健衛生施策の整備にもかかわらず、労働者の間に生み出されるのはセルフケアの重要性、ケアの自己責任化の規範であり、グローバルなエッセンシャル・ワークに組み込まれた「遅い暴力」の再生産に動員される主体である。さらに第6章（西尾）は、親密性や共同性の商品化について論じる。社会民主主義的福祉国家は、市場からの自立による人びとの「脱商品化」（エスピン・アンデルセン）であるといえるが、これら各章が示唆するのは、むしろ

ろ自己の最も親密な領域さえ商品化されていく状況であろう（白井聡のいう「魂の包摂」）。このような包摂を、社会民主主義的福祉国家による貧困層の包摂と捉えることは困難であろう。

二つ目に、公助、共助、自助を明確に区別された領域として、そのいずれかの拡大や縮小を論じることが妥当かどうかという点である。第3章（宮川）の論じる、属人的で非効率なレッドテープの削減は、確かに国家による行政のフォーマル化といえよう。しかし、そこで意図されているのは、起業家精神を持った市民を育て、市民による自由なビジネスによって国民の福祉を向上させることである。第5章（中窪）の州政府によるマンガーのブランド推進体制の促進は、確かに公的制度の整備といえる。しかしその制度のアクターとして活性化されるのは、起業家精神を持ったマンガー生産者、収益力のある経営者、あるいは協同組合などの中間組織である。さらに第4章（師田）によれば、賭博運営の国家によるフォーマル化は、必ずしも人びとの実践のフォーマル化を生まず、賭博に興じる人びとの社会倫理は、共同性の中で培われた道義的な正しさによって支えられていた。これらの諸章を読む時、フィリピンの社会変容において進展するのは、むしろ公助、共助、自助が明確な境界を持つ独立した領域としてそれぞれ存在するのではなく、相互に依存し合い触発し合いながら、分離不可能なほどに絡まり合った一つの装置として作動する状況であろう。このような公助／共助／自助の絡まり合いは、先進国をモデルとする福祉レジーム論 (p. 40 図1) によっては捉えきれない。

加えて、第1章（原）では、社会民主主義+反寡頭制の政治への変化が2010年代以降の特徴だとされる。しかし、いわゆる「ニューブリード」改革派地方政治家の台頭は、既に1980年代後半の民主化以降の傾向として先行研究で指摘されており、バグアオの登場が、果たして2010年代以降に特有の現象といえるのかは疑問である。この点が実証的に論じられない限り、本書の対象とする社会変容が2010年代以降の特徴だという、「批判的序論」の前提自体が成り立たないことになろう。

最後に、白石の「結論にかえて」の意義について

て触れたい。白石は、国家主導のもとで加速化する、直線のかつ均質な「時間／テンポ」に、同期しない／できない人びとの実践を、第9章（吉澤）の「動き（リホック）」の事例や、第10章（久保）の「急場を凌ぐ方法」を参照しつつ、進み続ける加速に対する「裂け目」をそこに見出そうとする。このような「脱同期」の実践から何が生まれるかは、まだ定かにはならないだろう。しかし少なくともそれが示唆するのは、人びとの生のテンポを、国民の生から死までの直線のかつ均質なライフコースの予測可能性へ転換することで可能となる、社会民主主義的福祉国家化ではないであろう。他者の持つ偶有性に巻き込まれ、被縛される中で、不確実なテンポを生きる自己とは、近代福祉国家を支える自由で自立した市民とは対極的な自己を示唆しよう。この点を、近年の文化人類学において議論される、他者とのサブスタンスの絶えざる分有によって生まれる人格としての「分人 (dividual)」や「分割可能な人格 (partible persons)」などと比較可能な概念にまで練り上げることによって、本書の議論の汎用性は高まるであろう。そのためには、「ままならない他者」として、人間だけでなく、自然、モノ、超自然的存在などのさまざまな非人間的的存在をも含めて検討する必要がある。新自由主義のもとで変容を迫られる自己とさまざまな他者との「ままならない」関係性に注目しつつ、それを単に「抵抗」や「分断」に還元することなく、「流動的で偶発的な応答の連鎖による連帯の可能性」を描くことができれば、現代フィリピンの「地殻変動」の考察が、今日の人文社会諸科学における脱人間中心主義的潮流において持つ、より普遍的な意義が明らかになるであろう。

（関 恒樹・広島大学大学院人間社会科学研究所）

金 悠進、『ポピュラー音楽と現代政治
——インドネシア 自立と依存の文化実践』

京都大学学術出版会、2023、v+320p.

本書のテーマは、インドネシアにおけるポピュラー音楽と政治の関係性である。とくに、「インディーズ」と呼ばれる「既存の商業主義的な生産・

流通システムにできるだけ依存しない自立的な生産のあり方を目指す文化実践」(p.114)が発展していく過程で、音楽家たちと政府の間に相互依存的な関係が構築されたことを本書は明らかにした。そして、そうした相互依存関係こそが、音楽実践法案という音楽業界を保護し、産業振興を目的とした法案に、表現の自由などを制限するような、つまり自らの音楽活動を縛るような条文を盛り込む役割を果たした、というのが本書のメインメッセージである。

音楽と政治の関係は、これまでのインドネシア地域研究でも取り上げられるテーマであった。日本でも知られる「ブンガワン・ソロ」を代表曲とするクロンチョンとインドネシアナショナリズムの関係や、大衆音楽として人気のダンドゥットとイスラーム政治社会の変容などが研究対象とされてきた。しかし、本書の著者は、そうした「ジャンル論」では「政治、経済、社会といった『非文化的』な変容との関わりを見えなくしてしまう」(p.18)と主張し、代替的な視点として「音楽シーン」を研究することの重要性を指摘する。「シーン」とは、特定の音楽文化が創出される地理的な空間のことである。著者は、インドネシアのポピュラー音楽を考えるうえで同国第3の都市で西ジャワ州都であるバンドンが重要であるとして、1990年代から2000年代にかけてインディーズが中心となったシーン形成の過程が詳述されている(第3章)。バンドンで隆盛したインディーズ・シーンは、改革派首長として地方政治の舞台に登場したリドワン・カミル市長が掲げる創造(クリエイティブ)産業の育成という政策と融合するなかで、政府との相互依存関係を築くことになったという。

地方都市における音楽シーンの形成は、バンドンに限ったことではない。バリやジャワ島中部のジョグジャカルタ、そして首都ジャカルタでもインディーズ・シーンが同時代に発展していった。そうした各地でのシーンは、2000年代から2010年代にかけてナショナルなレベルでの音楽シーンの形成につながり、「ジャンル、地域、世代といった旧来の文化的境界線を主体的に越境する新たな『連帯』のムーブメント」(p.216)を生むことにつながったという。こうした文化的ムーブメントも、